マ

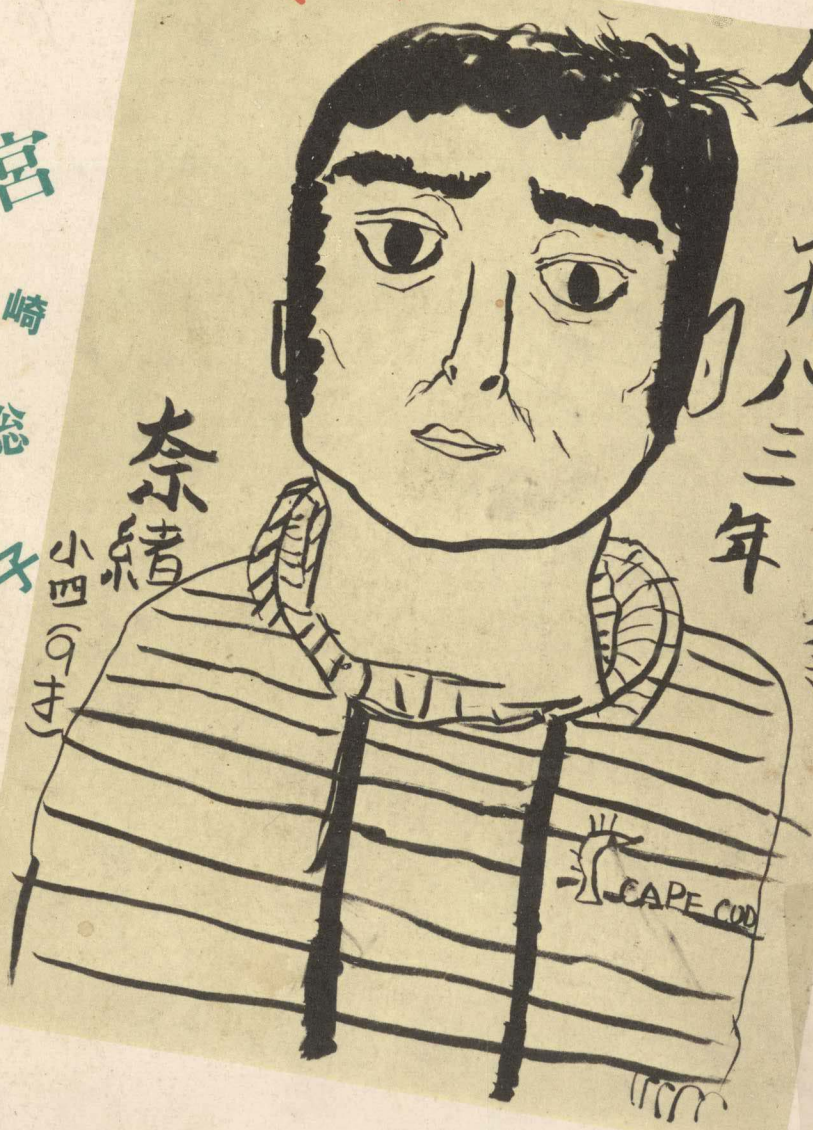
マに速達

宮崎総子

父

五月十三日(金)
一九八三年

奈緒
小四(9才)



速達に

宮崎総子

三梅書房

著者紹介

宮崎総子（みやざきふさこ）

昭和19年，博多生まれ，
立教大学英米文学部卒業後，フジテレビ入社，退社後フリーアナウンサーとしてＴＢＳ「奥さま８時半です」を担当。以来13年余，常にフレッシュな司会者として活躍中。

	ママに速達
	1984年３月10日　第一刷発行 1984年４月10日　第二刷発行
著　者	宮崎総子
発行者	小林美喜治
発行所	有限会社　三樹書房
	東京都千代田区神田神保町１―30
印刷所	常悦印刷株式会社
カラー印刷	凸版印刷株式会社
製本所	株式会社　積信堂

©Fusako Miyazaki　Printed in Japan　1984

0095―403001―8075　落丁・乱丁はお取りかえいたします。

ママに速達

この十年間ママにたくさんの手紙やメッセージを贈ってくれた娘、奈緒へ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ママに速達——まえがきにかえて

奈緒と私

仲代達矢

私は大人からは「何だか怖そうだ…」と恐ろしがられるが、子供からは怖がられたことはない。私自身、大人には人みしりするが、子供には無理なく親しみを覚える方だから、子供からもなつかれるのだろう。子供とは程度が合うというか、波長が合うというか、すんなりと気が合うのは我ながら不思議である。

十年前の年の暮、奈緒は生まれた。病院を退院して母親の実家に当たる私の家に帰って来たのだが、「帰った」「帰った」という女房の声に部屋の入口まで出て、総子の手の中をのぞき込むと、レモンほどの小さな、浅黒い顔に、子供とは思えないような強い眼差しで、きっと私の方を見た……もちろん眼は見えなかったのだろうが、小さいながら妙に険と艶のある目つきだった。女共の意見に反して「これは美人だ」と私は言った。これが奈緒と私の出逢いである。

奈緒と私はその時はまだ伯父と姪の間柄だった訳だが、母親の総子と私の女房は二人姉妹

で、私は総子が中学生の頃から一緒に暮らして来たし、おばあちゃんが私たち夫婦と一緒にいる関係で奈緒は生まれてすぐからうちに来ていたから、はじめからうちの子のような気がしていたし、うちの子であろうとあるまいと、私と奈緒は気が合った。私は、デパートへ行くのが苦手で二十年近く行ったことがなかったが、奈緒の手を引くと平気でデパートでも遊園地でも行くようになった。手のかかる子と、手のかかる大人が一緒に出かけてくれて大いに助かると我が家の女共は喜んだ。

「うちはもう一人生むから奈緒は養子にあげてもいい」と総子夫婦が言ってくれて、奈緒は私の養女になったが、実際の両親を「パパ」「ママ」、私と女房を「モア」「ネネ」と呼んで(私のあだ名はモヤで女房も総子も私をそう呼んでいたからだが)、奈緒は四人の父母を大いにエンジョイしている風であったし、四人の方もそれぞれ仕事を持っていたから、二組の夫婦とおばあちゃんで一人の子供を育てるという暮らしは、それなりのよきバランスを保っていた。

その後総子は離婚したが、ほめるのもおかしいがなかなかさわやかな離婚で、子供にもオープンだったし、総子は相変わらず明るく、仕事のあいまをみて、母親らしくめんどうもみていたから、離婚による悪影響は奈緒の場合は全くないように見えた。

驚いたことに四歳の奈緒は、何のくったくもなく私を「パパ」と呼びはじめた。かつて私を「モア」と呼んで親しんだように、父親のことを「ユキオ」と呼んで時々遊びに行ったり

噂話をしたり、これもまたなかなかにさわやかな人間関係のようであった。春から夏への季節の移り変わりを迎えるような自然さで、奈緒は大人達の変化をうけ入れたのであった。

ただこの離婚で私は父親としての責任を少々意識するようになった。……奈緒にとって父親の役目をちゃんと果たさねばならない、ただし養父母とはいえ、生みの親である総子の母親の座を犯し過ぎぬよう、生みの母親の立場を優先させてやらねばいけない……我々夫婦はそう話し合った。それは独身になった妹に対する思いやりでもあり、また節度でもあった。

子供は可愛い、特に外で仕事をしている者は家に帰って子どもに接すると、ほんとうに心がなごむ。私も女房も総子も、だから奈緒には内心デレデレである。しかし私は奈緒を時々うんと叱る。先に子供からは怖がられないと書いたが、奈緒は私を「怖いパパ」と一目おいている風である。うんと可愛がるかわりにうんと叱る、それが父親の役目だと思うからである。子供に嫌われることを恐れるずるい父親にはなるまいと思う。叱られ弱い子、外からの圧迫や、ストレスに弱い子、悪気もないのに自己中心で客観性のない子が多いのは、子供の頃父親にガンと叱られたことがないからだろうと、私は考えている。

優しくてしんの強い、いい女に育ってほしい……。生まれてからの十年はあっという間に過ぎた。あと十年たった時、奈緒がどんな娘になっているか……その頃はもう、今のように甘ったれてくれることもなく、恐らく、四人の親にも、親以上にめんどうをみたおばあちゃ

んにも、ほとんど関心を失って、奈緒の心はキラキラと外に向かっていることだろうが……それも成長の一つのプロセス、やがてしんみりと、もっと深く四人の親達や、おばあちゃんの人生を考える時代も来るにちがいない。ともかく奈緒がほんとうに幸せな女性であってほしいと思う。子供が幸せになれる方向への教育——それは親のつとめだと思う——それは何か……奈緒を見ながらそんなことを始終考えるのである。

目次

まえがきにかえて
奈緒と私　仲代達矢

三歳までの親孝行　12

保育料十倍！
——ナースリー日記　一九七四年四月～一九七五年三月（奈緒ゼロ歳）　26

かみつき奈緒の被害者続出
——ナースリー日記　一九七五年四月～一九七六年三月（奈緒一歳）　80

おばあちゃまの入院
——ナースリー日記　一九七六年四月（奈緒二歳）　114

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わからずやママ！
——ナースリーから東京保育所へ　119
マイペース、のんびり奈緒
——東京保育所で　一九七六年五月～一九七七年三月（奈緒二歳）　127
あさがお組の仲間達
——東京保育所で　一九七七年四月～一九七八年三月（奈緒三歳）　155
やけど騒動
——東京保育所で　一九七八年四月～一九七九年三月（奈緒四歳）　183
奈緒は〝お母さん〟
——東京保育所で　一九七九年四月～一九七九年九月（奈緒五歳）　203
奈緒のSOS　212

再び東京保育所で
——一九七九年十月〜一九八〇年三月　218
さようなら王様の木　239
おばあちゃまの手紙　241
離婚について　243
奈緒へ　249
あとがきにかえて　252

装幀　横尾忠則
写真撮影　広瀬飛一

ママに速達

三歳までの親孝行

子どもはその可愛いらしさだけで、三歳までに一生分の親孝行をしてしまうものだと聞いたことがあります。

「泣いた！」「笑った！」「あくびした！」「くしゃみした！」

そんな当然のことが親にとっては無上の喜び、小さいということはたとえようもなく可愛らしいもので、子どもは最初の三年間で充分に一生分の親孝行をしてしまっているというのです。

三歳までの子どもの可愛いらしさもさることながら、親の子どもに対する愛情がともすれば期待過剰となり、子どもの成長とともに、親の思い通りにならない不満をかこつ親たちにとって、これは恰好の戒めの言葉だと思います。

三歳をすぎてから子どもが与えてくれた喜びは、おまけの親孝行。

そう思えば、オッチョコママを悪戦苦闘させた我が家のベビーギャングも、親孝行娘とい

うことになるのかもしれません。

〝モーニングジャンボ〟という毎朝のテレビ番組の司会者を始めて十四年目、その間に私は結婚し、出産し、そして五年経って離婚しました。子どもは当分いなくてもいいというのが結婚する時の私達夫婦の考えでしたが、何とハネムーンベビー。仕事をしながら主婦業をすることさえ慣れないうちに、産婦人科通いが始まったのです。出産までの十カ月はまさにあわただしく時が矢のように過ぎていきました。

私は健康で、しかも、仕事をしているという緊張からかつわりも大変軽く、出産予定の一カ月半前まで番組に出演していました。八カ月をこえてからは、いつも黒い長いスカーフを片腕にかけて、出っぱったおなかをかくしたものです。

やっと休みに入り、少し落ち着いて出産にそなえようと思っていた矢先、せっかちな娘は予定よりも三週間も早く生まれたのです。昭和四十八年十二月十一日朝七時四十二分のことです。

娘・妻・母と、女の一生を段階的に考えていた私にとって、春に結婚し娘から妻へ……そして、その年のうちに母となってしまった女の境遇のあっという間の変化の早さは正直に言って、あれよあれよという思いで、自分のことというより、何だか人ごとのようで、女の一生を描いた小説かドラマでも見ていたような気がします。少しずつ大きくなるおなかや、体

型の変化を目のあたりにしても、体内に命が息づいていることがどうしても信じられない間に、あっという間に母親……二十九歳で決して若くはないのにそうなのですから、もし十代で母親になったりしたら、一体どうなることでしょう。恋愛から母親まで、女の一生の始まりは、若い女自身にとっても想像をこえたドラマティックさなのだと、十年を経た今、しみじみと思うのです。

私が妊娠した昭和四十八年当時、世の中の関心事はＰＣＢ汚染でした。連日新聞もこのことを記事にし、私の朝の番組でも、次々と取り上げました。

ＰＣＢは、河に流され、海を汚染して、小魚がそれを体内に入れ、それを中魚、大魚と食べてゆくため、大きな魚のしかも脂肪の部分には多量のＰＣＢが蓄積するといわれていました。魚の売れ行きは止まり、マグロのトロなどは汚染の最たるものとしておすしも敬遠されました。ＰＣＢは十年間ふえつづけ、人体に影響も大きい……、特に日本はその最たる国として、一種パニックに似た状態だったのです。

そんな時に妊娠したのですから、「バカネェー、今子ども生むなんて!!」と親しいディレクターにいわれましたし、自分でも健康な子供が生めるかどうか大いに不安でした。それに加えて、慣れない主婦業のせいもあったのでしょうか、体重は十カ月間で七キロしか増えず、産婦人科の母親学級でも、皆さんまるまるとしていらっしゃるのに、自分だけ母親をさぼっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com